
さらさら、流れる

ui

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さらさら、流れる

【コード】

N5205M

【作者名】

u.i

【あらすじ】

ゆったりとした日常を過ごしていたはずが、真夏に黒スーツの男に付きまとわれるタニカワ。密かにヤクザと呼んでいるその男が持ってきたアルバイトとは。

一緒に見ようねって、指きりしたんだ。

「随分と暇そうだな、タニカワ君」

もの思いに浸っているところに声をかけられるのは非常に心臓に宜しくない。

「な、なな何かご用事ですか、諫早さん」

こんなにも暑いのに全身黒尽くめだろう男に後ろから気配もなく声をかけられて、隠しようもなくビクリとしてから僕は恐る恐る振り向いた。のんびりとした生活を楽しんでいる僕にとって恐ろしい男が現れたのだ。

「用事はない……って言いたいところだが。今日はあったりするんだな、実は」

見た目だけは格好良い三十手前くらいの男は、何か含んだような笑顔をその口元に乗せて、空いていた僕の隣の席へと腰掛ける。こんな夏真っ盛りに全身黒尽くめで平和な図書館に現れた陰険そうな男は、ものめずらしそうに書架群を見やっってから僕の手元を覗き込んできた。そんな男の視線はまるで獲物を狩る肉食獣そのもの。もともとノミの心臓のような僕の心臓は一気に鼓動を早める。小市民である僕がこんな想いをしなければならぬなんて不幸だ。不幸にも程がある。

僕は折角読んでいた推理小説の犯人の名があと数ページで判明するだろうということろで断念せざるを得なくなってしまった。

「うう、折角ここまで陰陽師先生の長い説明を読み終えたのに……」
片手では持ちきれないような分厚さの本を撫でながら名残惜しみ

つつ立ち上がると、恐ろしい男はニヤリと黒く笑って見せた。

「おいおい、随分とつれないねえ。ふらふらしているてめえにちよいちよい仕事の口探しあててやってるつつーのによ。そんな俺様が用事を頼みたいって言うのを断るなんざ……」

「ううう、分かりましたってば。でもカンペキな諫早さんがそんな前振りつきで僕に頼むような用事ってあるんですか？」

真向かいで手芸の本を読み漁っていた年配のご婦人が、俺たちの会話が聞こえてきたのか怪しい人を見るような目つきでこちらを見ってくるのが視界に入る。

「あつち行きましょう」

こちらをじろじろと見ていたご婦人にも軽く一礼してから本を元の場所へと戻し、ご婦人にはヤクザにしか見えないだろう男を連れて、慌てて午後の図書館を後ろにしたのだった。

「それで、僕に用事とは？」

こんな暑い日に話をするのだったら、どこかの喫茶店で冷たいカフェオレでも飲みながらといきたいところだ……が。

「まあ、ちよつとしたヤボ用だが……俺が今やってる仕事に支障が出ていてな。ちよつくら女と会ってほしい」

こんな犯罪の匂いがしそうな会話を、一般市民の方々の耳に入れられるか？ という話だ。結果として、猫達すら寄り付かないような熱風吹き抜ける公園で僕達はベンチに微妙な距離を置いて座っていた。

「へー、仕事なら言語道断・迅速かつ非人情な諫早さんでも引つ張れない人っているんですね……痛ッ！」

ゴン、と小気味良い音を立てて諫早さんの拳が降ってくる。既に

抜けでるものもないのに口から何か出そうな感覚に陥って僕が呻いていると、耳に盛大なため息が入り込んできた。

「ったくよ、俺の苦勞も知らない若造が適当なこと言いやがって。だが、俺がてこずってるっつーのは本当だな。もうチャンスは残り一回ってところまで来ちまつてる。一回目はとうに失敗しているからな」

「へ……へえ……」

そいつはすごい。

やることなすこと強引かつ正確な諫早さんの手にかかってまだピンピンしているなんて初めてかもしれない。その上、不機嫌そうに語るのを見た目インテリヤクザな男だ。いろんな意味で恐い。

「でも、僕はただの暇人だし、女の子に会ったって……」

「いいや、お前が必要なんだ。はつきりと言ってしまえばお前のそのツラだ。今までの苦勞が微塵も出ていないぽんやり顔のお前だったら相手の女もうつかりと畏にはまるかもしれん」

「ワ、ワナって……」

インテリヤクザな顔で言われたくない。最後のあたりは自分では良く分からないだけにゴリ押しされてさすがにへこむ。

「……そうやって僕のことバカにする」

しかも、そういう軽口をこの人が叩くのは僕しかいないのが癪なのだ。僕みたいなのがいっぱいいるはずなのに、他の人たちに対して彼は礼儀正しく　だから僕は彼をインテリヤクザと影で呼んでいるんだが、今こうして行くべきところにも行かずふらふらしていたってうるさいことを言ったりなんかしない。

「ま、お前のぽんやり顔はどうでもいいんだがな。相手の女と仲良くなれ。それが仕事だ。それだけで俺の仕事がうまく収まる　お前でもできる簡単なアルバイトだ。分かったな」

「……はい？」

分かったな。分かったって、何をどう？

さもそれらしい口調で彼は言い切ったけど、諫早さんの口元にはさっきもちらりと見かけた意地悪そうな笑いが浮かび始めている。

「……俺にもう一度説明させる気か？」

諫早さんの二回目は、事前に鉄拳がついてくる。僕にできたのは、ちよっただけ肩をがくりと落としてから「分かりました」と返すことだけだった。

「駅前って苦手なんだよなあ」

やっぱり暑い状況は変わらないまま、僕は諫早さんが街頭でもらったというウチワを握り締めながらぼんやりと駅前のちよつとした公園に並べられているベンチに座っていた。他にも同じように人を待っているのか待っていないのか分からないような若者たちや、行く場所がないような老人達がだりりとだれたまま夜を待っている。目の前はひっきりなしにたくさんの方が行き交っていて、それを見ただけでも人酔いしてしまいそうだった。おまけのように、こんな駅前でもあらん限りの生命をこめて夏をアピールするアブラゼミの声までする。

「…………アキくん？」

細かい花柄のふんわりとしたワンピースを纏った女の子が、ビツクリとしたように俺の目の前で立ち止まった。それから僅かにこちらへと近づきながら、誰かの名前を呼んでおずおずと僕を見てくる。「本当にアキくん…………？ 嘘…………」

ふらふら。酔っ払ってるわけでもなさそうなのに染めた栗色の髪にぱつちりとした二重の瞳の、可愛いと誰にも言われるだろう女の子が一步、また一步と僕に近づいてきた。

「えーつと、すみません。どちらサマでしょう？」

驚きなことに、現在の僕の臨時雇用主となっている諫早サマは僕に相手の情報などなんら一つくれないまま僕を金融会社の広告がかでかと載ったウチワと僅かなお金を持たせてここへと置き去りにしてくださったのだ。ここにいれば、絶対にお前を見つけ出す人間がいるからとか何とかってあのブラックスマイルでそう言い残している。ということは、彼女が諫早さんを困らせているお嬢さんなのだろうか。確かにこのふらふらとした危なっかしさはちよつと心配だけ

れど、だからといって諫早さんが用事あるようには到底見えない。ひとまず相手の出方を見つつ、ゆっくりと立ち上がると少女はひどく落ち込んだようにがっくりと頭を下げた。それから、「ごめんなさい」と漏らした。

「人違いだと分かっていたのにごめんなさい。似ていたものだから……」
そう言ってもう一度頭を下げると、もう僕の方は見ないで少女は足早に立ち去っていく。

……あれ。何か聞いていた話と展開が違う。それから、なんとなく彼女の話し方には覚えがある気がした。最近知り合った、三丁目の青木さんに似ているのだったか。

「ま、待って！ だから、どちらサマと聞いているでしょう?!」
このままでは何も変わらないで終わってしまうじゃないか。彼女は、僕を見つけてくれたのに。

「ま……待っ！」

盛大に僕はスツ転んだ。顔も膝も手も。全部痛いけれど、ずるずると立ち上がるうともがいている僕に気づく人は誰もいない。たまたま気づく人もいるけれど、遠巻きにじろじろと視線を投げては去っていく。

声をかけようかどうか悩んでいる感じの年配のご婦人に愛想笑いをしてみるが、思ったより強く足を捻ってしまったようだ。もう無理かな。あんなに足早に立ち去ってしまったんだから。遠くから諫早さんの意地悪い笑い声が聞こえてきそうな気がする。

「……立てる？」

コホン、と軽い咳払いをしてから差し伸ばされた手。まさかと思いながら恐る恐る視線を上げると、少し困ったようにさっきの少女

が僕に向かって手を伸ばしていた。ちょうど綺麗に植えられた花壇の陰になって、僕たちの姿は周囲からは見えなくなったのかも知れない。

「ありがとう」

つい嬉しくなつて笑顔で言うと、手を掴んだ瞬間に彼女もほんの少しだけ笑つてくれたのだった。

「タニカワ君もミステリ小説好きなんだ？」

夏に金もない未成年が行けるところなんてごく限られているわけ。

今日こそ犯人の名前が分かると息巻いていたところで声をかけられ、僕はやはり肩が震えたまま振り返つた。しかしその顔はここ最近会うようになったものだったので途端に安心する。こうやって僕に話しかけてくれる人はごく少数だけれど、たまにヤンキーみたいなことから声をかけられたりしてどんどんと警戒心が強くなってきている気がする。

どうやら、厚さだけでも腕力が鍛えられそうな話の犯人を知るのは今日も延期になりそうだ。僕はそつと本を書架に戻してしまうと、すぐ傍にあつた別な文庫本へと手を伸ばす。彼女はそれを興味深げに見ていた。

「うん。すかつとどんでん返ししちやつたりするのが結構好きでさ。

……深山さんも？」

偶然とはいえ図書館で出会つたということとは彼女も本を読むのだということは間違いなさそうだったが、会話を続けたくて僕は彼女の問いに疑問で返した。立ち話も静かな館内ではすぐに目立ってしまう。

彼女も目的だったらしい一冊を手に取ると、こちらよりも幾分賑やかな児童書が揃うエリアへとどちらから言うでもなく向かった。途中で通った渡り廊下は屋外なせいか、図書館という緑も多い環境のせいかセミ達も大群でより一層元気に鳴き喚いている。

うるさいね、と返すとそうだね、と彼女は頷いたりしながら僕たちは目的地に着いた。

「……そうそう、この話の結末わたしもビックリした！ タニカワ君と好み似ているかも」

隣に座り、お互いに読むはずだった本は長机の上に置いたまま。児童書が揃うコーナーは子ども達が半分遊び半分絵本と戯れている光景と、おしゃべりを楽しみたいお母さん達やマンガと冷涼目当てのサラリーマンがいたりしてほどほどに騒がしい。僕たちもお互いに好きな本の話をしていくうちにどんどんと会話が盛り上がった。った。

あの日。

初めて彼女と出会った日、見事にすつころんだ僕を見かねて手を差し伸べてくれた彼女 深山さんは「特別」と言ってくれて僕が滅多に近づけない喫茶店で冷たいカフェオレをごちそうしてくれた。さすがにそのままでは男としての面子に関わると思った僕はなけなしのお金で再び会えた彼女にクリームソーダを奢った。

彼女は、雑踏の中でもふらふらとしている僕を見つけてくれる。

誰も彼もが他者の存在なんか気にしていない場所でも。

「何の本だったか、描写がキレイだなんて思った本があるんだ。真つ暗闇のところまで目隠しのまま女の子が連れて行かれて、最後にいいよって言われて目を開いたら ホタル、とかね」

ミステリ小説から、果てはこんなものまで読んだ、これが面白い

という本全般の談義まで及んでくると僕は自分の脳裏にあった文字を思い出す。文字は、映像へと変わった。それくらいに情景が美しい小説だったのだ。

「ホタル！ 見たことないけどやっぱりキレイなのかな？」

「キレイだと思うよ」

彼女がいきいきとした様子で聞いてきたのを僕は頷き返しながら首を傾げた。そういえば、文字は映像に変わったけれどそれを実際に見たことなんてあっただろうか。小さい頃なら見たことあったかな　そもそも、そんなことあったか？

どこに行けば見られるの？ と彼女に聞かれて僕は悩んだ。

確かにここは地方だから都会ほどチャンスがないわけじゃないだろうけれど、どこまでも舗装された道が続くところにはいるような気がしない。なんとなく、アスファルト舗装のされていないところとした道が続く奥の奥　そんなところが相応しいような気がした。それを彼女に話してみると彼女は楽しそうに頷く。

「探しに行ってみない？」

「どうやって？」

ここはまがりなりにも一都市なのだ。僕が思うような場所は、多分この街の近辺にはないような気がするのだけど　探しに行くにはどのくらい遠くまで行けばいいのか。尻ポケットに頼りなさに鎮座している薄い財布の中身も気になるのが情けない。

「電車でね、行けるところまで。いつも学校に行く二つ隣の駅でしか降りないから、いつもとは逆の方向に行ってみたいなって思ってピンポードから最初に切符買っちゃって、その切符で行けるところまで行くの」

あとは適当、と言って彼女は名案とばかりに笑った。その笑顔が本当に楽しそうで、僕もつい頷いてしまう。大丈夫、恥をかなぐり

捨てて僕の行けるところまでをちゃんと話せばいい……できるのか不安だけれど。

図書館から出て夏の方方は明るい。勢いよく華奢なサンダルで歩き出す彼女の隣を早足でついていきながら、僕はふと見上げた空に息を飲んだ。

真っ白だったはずの雲が、その端っこが赤い。胸のずっと奥に、おぼろげに残っている記憶を揺さぶられるような、とても懐かしい赤だ。これからあの赤く滲む空の方へと向かうのだと思うと僕も嬉しくなつて足に勢いづく。

「……おい」
が。

神様というのは見ているもので、男くさい低音が後ろから追いかけてきた。そのまま彼女と共に歩き去りたい衝動に駆られながらも、僕はぎこぎここと飛び上がった心臓を守るように手をあてながら振り返る。突然、駅前で黒づくめの男に声をかけられた僕に彼女も怪訝そうな表情になった。当たり前だ。これではどう見たってヤクザにいちやもんつけられそうになっている一般市民の図だ。

「バイトの給料、取り合えず前払いしておいてやる。彼女とデートなんだから？」

ニヤリと黒い笑い。きつと、彼 諫早さんはお腹の中まで真っ黒に違いない。これはもとはといえば彼が依頼してきた仕事とはいえ、僕はそういう気持ちではなくなりつつあった。差し出された複数の福沢さんに胸が高鳴るけれど、これを受け取ってしまった僕は仕事として認めたといいことになるのではないか？ 何故かそれに抵抗を覚えてしまう。しかし、僕の心情も読んだように愉快そうに諫早さんの口元がにんまりと笑いの形に歪んだ。

「安心しろ、そんなに警戒しなくてもただの小遣いだとも思えば

いい。あとでしっかりと働いて返してもらおうが」

それからゆつくりと諫早さんの視線が彼女へと動く。

「ま、コンビニの早朝バイトは早寝が肝心だ。遅れないようにしろよ」

ひら、と福沢さんが舞いかけたのを慌てて受け取ると、諫早さんは片手を挙げて雑踏の中へと足早に消えていった。コンビニ？ まさかあの人が、自分はコンビニの店長だとも言いたいのか？ あんな顔で？

「……タニカワ君のお店の店長さん、見かけは怖いけどなんだかい人みたいだね。……あ、電車が来ちゃうよ！」

いや、多分見かけどおりの人だと思うんだ。けれどここは素直に助かったと言うべきか。もし諫早さんが本当にコンビニで店長していたらどうしよう。あの人にも仮の職業みたいなものがあるのだろうか。そんな強引な商売をしていそうなコンビニ、あつという間に潰れちゃうんじゃないのか？

彼女が汗をかくのも厭わずに走り出す。

僕は黒い想像をかき消すように一度だけ首を左右に振ると、まずは切符を買うべく駅の中へと駆け込んだのだった。

「間に合って良かったあ！」

はー、とお互いに深く息を吐き出す。ぎりぎりで駆け込んだ電車の中はあらかたの人を今出たばかりの駅に下ろしてきたせいか、難なく席に座ることが出来た。これでぎゅうぎゅう詰めの中内だったらしばらく汗と不快な争いを繰り広げなくてはならないところなのだろうが、ほどよくまばらに人が乗った車内は冷房のききも良くてなかなか快適だ。二人同時に息をついたところで小さく吹き出した。

隣のボックス席に座っていた中年のサラリーマンが不思議そうな顔でこちらを見てきたけれど、彼女は興味深そうに窓の外を見やっっている。いつもなら中心の駅と先ほどの最寄り駅との往復しかしていないのは本当だったようで、窓に映る景色は彼女にとっても新鮮なようだった。

ますます夏の空は赤みを帯びて、少しずつ中心街から離れて空が広くなつていく程にその度合いを増していく。こんな無計画なことをして彼女の両親や周囲は大丈夫なのだろうかと今さら心配になっただけれど、彼女は大丈夫、と苦笑して見せた。それから己の携帯電話をちらつかせて見せた。

すっかりその存在を忘れていたけれど、たしかに携帯電話があれば電波が届く範囲の限り音信が取れなくなるということもないのだろう。さっきメールもしておいたし、と説明する彼女に相槌を打つと、再び彼女の視線は真紅に染まる空へと移っていった。

「遠くに出かける時って、いつもすごくワクワクしちゃうんだ」

そのまま、窓枠に備え付けられている小さな台に肘を乗せて小さな声で話しかけてくる。僕もその気持ちは分かるような気がして頷

いたけれど、彼女の視線は空よりもずっと遠くを見ているようにも思えた。

「できれば、この楽しい気持ちのまま　　現実にもう戻りたくないなって思ったりとか、ね」

彼女の口もとほ微笑んでいるようにも見える。

見えるのに　　何故か彼女が今言った言葉がとても寂しく思えて、僕はどうかしたいのに返せる言葉が見当たらないのだ。

「……なーんてね？」

それからようやく彼女がこちらへと向き直る。先ほどの言葉が本音だったとしても　　冗談として流そうとしているのを感じて、僕も笑ってみせる。何となく、僕の頭の中には最初彼女に出会った時の、必死な様子が思い浮かべられた。

「そうそう、タニカワ君の下の名前をまだ聞いてなかったよ」

「……タニカワじゃまずい？」

それも、彼女に質問されるまでだった。

方向転換とばかりに彼女が訊いてきたことに僕はたじたとなる。タニカワタニカワなんて日本人はいないだろうけど、しかし僕の名前はタニカワなのだ。

それ以外を、僕は知らない。

「ふーん……別にいいけど。なんか、タニカワ君と話していると最近初めて会ったばかりの人って思えないんだもの」

案外あっさりと彼女は僕の下の名前を訊くことを諦めてくれた。最近会ったばかりとは思えない　　それには僕も納得だ。彼女は誰かに似ている気がする。

「これからも会えるかな？」

「会えたら僕も嬉しい」

よし、とお互いに顔を見合わせて笑った。

また隣のサラリーマンがスルメイカを口にくわえながら不思議そうな顔でこちらを見てきた。今度は彼女も気づいたようで、パチパチと数回瞬きをしてから肩を竦めて見せて、僕らはまた笑った。

「よし、ここで降りてみようか」

やがて、彼女が何度も電車の天井近くに貼られた行き先順路板を見ながら確認していた地名を車掌さんがアナウンスするや否や、彼女は宣言した。そこは僕たちの買った切符で買える最遠の地より一歩手前の駅だ。思ったより遠くには行けなかつたけれど、明るい夕焼けのなかに浮かんでいた窓の外の景色は僕たちの出発地からは一変していて、今頃は煌々としていいるはずの街灯の類があまり見当たらないのがここからでも分かる。

無人駅の説明を機械の音が丁寧に行っているのを訊きながら銘々にしまっていた切符を取り出すと、僕たちは電車がしつかりと止まる前から立ち上がり、ゆっくりと減速していくのをドアの両側にもたれて一緒に見た。

「いるかな？」

「どうだろう？」

しつかりと帰る時間を確認してからそこだけ明るい無人駅を後ろにすると、後はもう空からの僅かな明かりだけが頼りだ。うるさいくらいに蛙があちらこちらで鳴いているのを聞いていると否が応でも期待は高まる。

街灯は少ない。

通り過ぎる人も車も少ない。

暢気に蛙が道路を散歩している。

「ホタルってどこら辺にいるの？ キレイなところ、っていうのは聞いたことあるけど」

「……うーん、キレイな川の近くって聞いたことある気がするけど……」

本当にそうだったのかは自信がない。思ったよりも頼りなく聞こえてしまったのか、数歩先を行ってから彼女が隣にいないことに気づき、僕は慌てて振り返る。前へ前へと動いていた彼女の足が、急にピタリと止まってしまっていた。たった数歩の距離でも、薄闇の中ではもっと遠くにいるように感じた。

「……帰りたい」

彼女の口からぼつりと言葉が零れた。どうしたのだろう、と問おうとした僕の耳に、遠くで雷鳴が轟く音が聞こえてくる。ポツリ、ポツリと大粒の雨が空から降り始めた。

「タニカワ君、帰ろう」

彼女がもう一度、無表情な顔で、抑揚のない声でそう言った。どうして、と返したいのに、突然遠慮もなく降り始めた雨に、その音に身体が竦んでそこから動けなくなってしまった。

声すら、出ない。

「タニカワ君……?」

彼女が 深山さんが泣きそうな顔になっている。

「帰ろう、ここは怖いよ」

何が怖いのか？ でも、確かなのは今、僕が動けないことだった。そっと手に温かい感触が宿って、金縛りか何かから突然解放されたように僕の手が、ようやく動く。きつと時間にすればそんな大した時間じゃなかったはずなのに、ずっと長いことここに身体を縫い止められているようだった。

無言のままのろのろとした足取りで、二人で手を繋いだままで無

人駅へと戻る。幸運なことに偶然通りかかった上り 出発駅へ戻る電車へと乗り、僕たちは車内で寒い思いをすることになった。

「……ごめんね、わたしが行くうって言ったのに……わたし、川が怖い。夜の川は何も見えなくて、真っ暗で……ただあの恐ろしい音が、わたしの大事なひとを飲み込んで……」

朝ならともかく、もう夜の領域に入る今の時間車内はがらでいるのは大きな旅行用バッグを抱え持って疲れたように眠っている人くらいだ。濡れた体のままではやはり寒いのか、彼女はガタガタと体を震わせながら僕の手をぎゅ、と握りなおす。

「僕は雨がダメなのかもしれない……いや、雷がダメなのかな？ そういえば雨の日に出たことなかったしねえ。ね、暗いのが怖いのなら、暗くなければいいんだよね？」

「え？ うーん、どうだろう……昼でも怖いかも……」
彼女の手がとて温かくて。さっき、雨で冷え切ってしまった僕の内側にぼかぼかとしたものを取り戻してくれようとしているかのようだ。

そんな彼女に怖いものがあるというのがイヤで、僕は一つの提案をした。ちらりと視線を動かした先に飛び込んだできたもの。

花火、の二文字。

「今度の日曜日、駅の近くの川辺で花火大会があるの知ってた？
一緒に見られないかな」

僕の暢気な口調につられたのか、少しずつ彼女の震えが止まってく。どうやら寒くて震えていたわけではないようだ。不思議そうな顔でこちらを見てきた彼女が不意に可愛らしく……愛しく思えて、僕の表情が緩むのが自分でも分かってしまう。

「イヤならそう言ってくれていいよ。でも、きっとキレイだから。……うん、そういえば花火なんかまん前で見たことなかった気がする

るし」

「……花火なんか、三年くらい前にみんなでコンビニで買ったヤツ以来かも」

ニヤけた顔をした僕の表情に気づかなかった彼女は小首を傾げて考え込む振りをする。

花火。

真つ暗な空にどんなものよりも美しい光が散らばるのを僕は覚えている。それは何故かずっと遠くで見ただけの記憶しかないので残念だけれど、もしかしたら彼女と残念な記憶を塗り替えられるかもしれないのだ。

彼女が嫌がる川のギリギリまでは行けないだろう。ただ、キレイな場所でもあったのだと彼女の記憶に残れば嬉しいだけなのだ。悲しくて辛いだけの場所ではなくて。

「……行きたい、かも」

「大丈夫？ まあ、別に近づけなくてもどこかの屋上からだったら見えるだろうし……」

川に対する思い出を払拭してもらいたいけれど、彼女が先ほどのように泣きそうな表情をするのも避けたい。彼女に逃げ道を残しておいても、彼女はもう悩む素振りは見せなかった。

「本当に真つ暗じゃないなら、きっと大丈夫。タニカワ君も一緒だし……今度は、大丈夫」

「そっか」

僕たちは再び顔を見合わせていると、どちらからともなく笑い出した。寝ている人を起こさないように、小さく小さく……しかし、我慢しようとするほど楽しくて。

やがて僕たちが出発した地点である駅へと戻る頃には、僕の苦手な雨は過ぎ去っていたのだった。

「よし！」

朝とはいえない時間から鳴いているカナカナゼミと一緒に緊張の一時を過ごし、やがて朝陽が顔を出して僕は手を空に伸ばしながら立ち上がった。こんなに晴れているなら夜の花火もキレイに見えるはずだ。暑くなりそうなのはイヤだけれど、楽しみがあれば何とか乗り越えられそうな気がする。と、思ったその時。

「仕事はうまくいっているか？」

「ひえあッ！！」

そろりと背後から肩に手を置かれて、僕は今なら垂直飛びで素晴らしい記録を出せそうなくらいに飛び上がった。

「い、諫早さん……いや、店長？」

「店長だあ？ そんなやつすい呼称を俺につけるっつーのはケンカでも売ろっつてのわ、チビ。あの女とはうまくいってるんだろっつな」
「ここに、怖い。やっぱりこの人ヤクザそのもの……！ 先日前借りしたお金は電車賃くらいにしか使っていないので今すぐお返ししたい気持ちに駆られているのに、そんな僕をヤクザは思いつきり鼻で笑って見せた。」

「ま、てめえにはそんなに期待していないがな」

「……花火を見に行つて来るんだ、今夜。でも、彼女はきつと諫早さんから逃げられるつて……僕は、思う」

何とか陰険ヤクザに負けないように僕はいつもよりも視線を思いつきり上げて、心持ち背を真っ直ぐ伸ばしているのに、諫早さんはニヤニヤと笑ったままだ。

「へえ。仲良くなる、というところはクリアしたってわけだ。じゃ

あ、ボーナスチャンスってことで一つ賭けでもするか？ お前が負けたら一生俺の下でタダ働きだ。もし、お前が勝ったら 願い事を一つ、叶えてやる」

「ええー？ 諫早さんに叶えられる願いって怪し………いだっ！！」
言い切る前に鉄拳制裁が下された。目蓋の裏に一気に真っ白な星が巡りだし、僕の視界はチカチカとした不快な光で一瞬覆い尽くされる。

「俺だから何でも叶えてやれるんだろ。てめえらが勝手に創り上げたお空の神サマなんてやつらに何ができる？ あるかどうかも知らねえ空の世界からただ見守っているだけの連中に。まあ、お前が勝つ見込みなんざないんだから諦めろ。その方がずっと永く彼女と一緒にいられるんじゃないのか？」

「……諫早さん」

いろいろと言いたいこと、言い返したいことはあるのに、目を細めて口もとから笑みを消したその顔はただただ敵しくて。それが冗談だとも言うように再び彼の口もとに笑みは戻ったけれど、それでもやはり僕が受けた印象は拭いきれずに名前を呼ぶことだけが精一杯だった。

「ま、お手並み拝見といったところだな」

そういつて締めくくると諫早さんは今までの迫力が嘘のように大きなアクビをしてから「暑くなりそうだな」とごちた。なんだかそんなことを言っていると、諫早さんも真つ当な人間のように見えるというか、そもそもそんな暑くなると分かっていて暑苦しいスーツ姿をしているなんてやっぱり変なひとだなあと思いつながら僕は勇気を振り絞って口を開く。

「ほ………本当に？」

「俺は他のヤツとの約束事だけには嘘をつかない。それだけは絶対だ」

お伺いを立てるように聞いてみれば、慥然とした表情で諫早さん

は答えてくれた。

「ったく、こんなに毎日暑いと俺の仕事が増えるばかりで参っちゃう。とっとと仕事決めて俺ンとこの正社員でも目指してみるよ、アルバイト」

楽しくもなさそうに口だけで笑うと、ひらひらと手を振って諫早さんは去っていった。

「どんな願い、でも……?」

いいように諫早さんにかかわれている僕には首を傾げたくなるセリフではあつたけれど、今の僕にとってその言葉は魅力的だった。

大丈夫。

彼女なら、きっと大丈夫。賭けに勝つのはきっと僕だから。

「タニカワ君!」

いつものように図書館でゆったりと日中を過ごし、僕は来るべき時を迎えた。彼女と話したいことはまた少し増えている。なんと言つても、ようやく犯人の名前が分かったのだ。

周囲はすでに夜へと差し掛かり、ざわめきながら着飾った人々が今日の舞台である川のほうへと流れるように歩いている。それに遡るように、最初に出会った時に着ていたのと似た細やかな花柄のふんわりとしたワンピースを着た彼女が僕に向かって手を振った。

いつもだったら群集に埋没してしまうかもしれないその格好も、周囲が浴衣や着流しばかりなので自然と目立つ。僕もいつもの格好だから、二人とも違ふところへ行くみたいに見えるかもしれない。

「深山さん」

大きく彼女に手を振り返し、僕は早足で歩いた。やがて人々の流れに逆らって歩いていた彼女と合流すると、僕たちは手を繋いで二人で歩き出す。

「ね、金魚すくいやってる」

「……こつちにはカメがいるね。うわ、ザリガニも……！」

川が近づいてくると、道の両側には屋台が設けられていて余計に人々の流れは悪くなった。人の群れに押し流されるように歩きながらもたまに屋台に興味を惹かれて覗き込んでみたりする。可愛らしい柄の浴衣にひらひらとした帯で飾った子どもたちがしゃがみこんで歓声を、たまに悲鳴をあげながら金魚たちと格闘をしたり、電飾ブレスレットをした手であれこれと食べながら笑いあう大人たち。

わたあめ、りんご飴、焼き鳥。

金魚すくいに型抜き、ピンポン玉すくいに あれらこれら。

「わ」

ようやく吐き出されるように屋台通りから抜け出ると、そこには今日の舞台が広がっていた。もう既に銘々で用意した敷き物や食べ物で準備万端といった家族連れの間を縫い歩きながら近づいていく。目の前は、暗く沈んだ川ではなかった。

「……キレイ、だね」

隣に立つ深山さんの声が震えて聞こえた。川を流れていく無数のやわらかな光。その一つ一つには子どもが描いたらしい力強い絵から、心を込めた文字まで様々だ。大きさは十分片手でも持てるようなものだったけれど、光 灯籠を流す役目を負った人々は丁寧に両手で抱えもち、願いを込めてそっと水面へと流していくのだ。

僕たちが立ち尽くしている間にもどんどんと光の群れは増えていく。屋台で聞こえていた騒がしい音すらも、光が増えていくことに

消えていき 僕たちの周囲にもたくさんの人たちがいるのに、誰も魅入られていた。

「そろそろ座ろうか……だ、段ボールしか座れそうなものがないんだけど……」

こんなにも楽しみにしていたというのに、僕はうつかりと敷物というものが必要であることを失念していたのだ。僕はともかく、彼女の服を汚すわけにもいかないというのに。今まで思いつめたような顔で光の水面を見つめていた深山さんは、僕の存外情けなく零れた声にこちらへと視線を寄越すと、ふう、と息を吐き出した。それから苦笑して頷くと、彼女の手が後ろ手に隠していた段ボールへと伸びる。

「さっきなんで屋台の人から段ボールなんかもらっているんだろうと思ってたけど、そういうことだったんだ？　ありがとう、タニカワ君」

二人分の段ボールを敷いて座り込む。少しずつ光は下流へと進んでいってしまったけれど、向こう岸にも続く屋台が放つ光が川面に映っているせいか彼女は大丈夫なようだ。

「今日ね、お母さんが浴衣着て行かってうるさかったんだー。わたしが花火行きたいなんて言ったの、多分初めてだから。わたしよりお母さんの方が嬉しそうだった」

「……浴衣着れば良かったのに」
思わず僕の本音がポロリと漏れた。もちろん、ワンピース姿の彼女だって十分可愛いけれど、浴衣を着た姿も見てみたい気がしたのだ。彼女のそんな姿を見れるのなんて今日が最後のチャンスだろうし。

「だって……下駄履くと、足が痛くて歩けないもの。もしもって時に走れないの、イヤだし」

「そっか。似合いそうなのになあ。でも、痛いのはイヤだよな」

そうそう、と彼女は何度も縦に頷いた。彼女がぎゅう、と僕の手を掴んでくるから彼女の横顔を見ても、彼女の視線は光り輝く川面にだけ注がれていた。

「……本当にありがとう、タニカワ君」

彼女の口もとに仄かに浮かぶ微笑。

きつといつもの僕なら彼女が笑うのを見て、良かった良かったと思っただけに違いない。彼女が笑ってくれるのは嬉しい。僕に何も感情がなかったとしても、何の想いを向けられていなかったとしても、笑顔を見るだけで僕も安心できるような気になるのだ。けれど今、彼女の口もとに浮かんだものを見た途端に僕の内側がざわついた。

「よっし！……焼き鳥買ってくる！ 深山さんは食べたい物ある？！」

「え？ えーと、わたしは……お好み焼きかな……？ 夕飯食べてなくて」

了解、と僕は一際元気良く声を出した。彼女がビックリしたような顔で 現実に戻ったような顔で瞬きを繰り返している。

いつもは哀愁が漂う僕の財布も、店長……じゃない、諫早さんがくれたお金で潤っている。今日をうまく乗り越えられたら何かが変わる。そう確信していた僕は、僕に残された全財産であるだろうこれを使う決心をした。

財布の中から取り出した千円札を握り締める。こうしていれば、僕のこと気づいてくれる人が増えることはこの間切符を買った時に経験済みだ。

「待っててね、深山さん！ 僕、二人分買ってくるから。多分一人じゃ食べきれないから先に帰ったりなんかしないでよ！」

「……待ってるってば。まだ花火だって始まってないもの。……迷子にならないでね。わたしは、ここにいますから。タニカワ君のこと

待っているから、必ず戻ってきてね」

勿論、と僕は勢いよく頷き、彼女に向かって小さく手を振った。それが大げさに思えたのか彼女が吹き出して笑う。

あれ、どうしてだろう？ 今、この情景がすごくすごく懐かしく思えたのだけど。

それよりも食べ物だ、食べ物。きっと彼女もお腹がすいているから思いつめたような顔をしたに違いない。空腹の人間ってというのは結構人格が変わってしまうものだもの。

再び飲み込まれるように屋台が連なるとこへ飛び込むと僕の耳に一気に雑音が戻ってきた。

僕がいるのに、僕が無視される場所へ。

「おっ、どうだい兄ちゃん！」

ガハハ、と豪快に笑うハゲ頭がもうもうと熱気のコもる屋台の奥から声をかけてくる。右目のすぐ横にこれまた目立つ傷があったりして、こんなご時勢にとこちらが心配になってしまふような姿だ。

僕が食べたかった焼き鳥はすでに手に入れることができていたが、不幸なことに焼き鳥屋にはお好み焼きは売ってなかったのだ。他にも冷たい、しかし平時よりもいくらか上乘せされたぼったくりジュースと、つい雰囲気にはだされて買ってしまった彼女用の電飾ブレスレットをピコピコと光らせながらハゲ頭のオヤジの屋台の前で立ち止まった。

もう少しで屋台通りは終わってしまうし、後は橋を通って向こう側に行かないと更なる屋台にはたどり着けない。しかし橋の上は交通規制がかけられているものそこから花火を見ようと待ち構えている人たちによって占拠されており、そこを迅速に通り抜けられる自信が僕にはなかった。人がぎつちりとしたところは僕のきらいなヤンキーまがいにも目をつけられやすいのだ。

「う……う……」

悔しい。普通の人が嘗むような屋台で買ったかったのに。

「買えばいいじゃないか。取り合えずこれを喰ったせいであの女が死ぬようなことはない」

「ひえあ?!?!」

後ろから両肩に手を置かれ、僕は今までにないくらいに飛び上がった。犯人は分かっている、分かっているのに！

「……本当に飽きないな、お前は」

ペットだったら飼いたいくらいだ、と名誉毀損なことをさらりと

言いのけて闖入者 諫早さんは僕の隣に並んだ。

ああ、それにしても本当に似合わない。こんな熱気むんむんのお祭り会場に汗もかかずに立つ黒スーツの男（性格はインテリヤクザ風味）だ。ほら、屋台のハゲオヤジも怪しい人を見るような目つきになっているじゃないか。

「うーん……あの、一つください」

「あ？ ああ、ほらよ」

思ったよりも手際のいいハゲオヤジは既に焼いてあったお好み焼きに豪快にソースをかけるとパチリと輪ゴムを巻いて僕の千円札と引き換えにし、それから油污れのついた手のままで500円玉と100円玉とを一枚ずつ返してきた。それでもオヤジの視線は諫早さんから離れないままだ。まあ、確かにカツコいいのは認めるけれど、やっぱりヘンなんだよなあ……格好が。何はともあれ、僕はお好み焼きを入手することができたのでようやく彼女のところへ戻れるぞ、と息巻いた時だった。

「え？ 雷……？」

屋台通りを急いで抜け出して彼女がいる方を見ようとした僕の視界の隅に、夜の空を渡り走る光が映った。それから遅れてドーン、という少し重い音。呆然と空を見上げた僕の隣にまた諫早さんが立ち並ぶ。……暑苦しいと思う僕の心を読んだかのようにだ。

「知らなかったのか？ 今日の天気予報は一日晴れ。しかし、夕方からは一時雷雨の恐れがあるでしょう、だ」

諫早さんがそう言ったのと同時に大きな雨粒が僕の頭に落っこちてきた。再び走る雷光、遅れて聞こえる轟き。

情けないことに、僕の体は再び金縛りにでもあったかのようにそこから動き出せなくなった。僕と諫早さんの隣を、慌てどよめく人々が口々に文句を言いながらせめて雨を避けられる場所へと走り去

っていく。

彼女の 深山さんのところに行かなくては。だって、彼女は僕のことを待っているって言うていたもの。こんな大雨に打たれたままずつと外にいたら、今度こそ風邪を引いてしまう。なのに、僕の頭の中は動けないことによるせいも混乱しかけていた。

遠くで、近くで閃く雷光。

逃げ惑う人々の声、強すぎる雨。

何もかも飲み込む、光を拒絶した夜の川。

震えだしたからだに触れてくれる温かな手は、ここにはない。

「……そのぼんやりとした頭が忘れようたつて身体が覚えているとは、皮肉なもんだな」

そつと諫早さんの手が僕に近づいてきたかと思うと、ふ、と身体が楽になった。楽になれたのはいいものの、膝まで笑ってしまったそのまま地べたに座り込んでしまう。頑張つて手に入れたお好み焼きを、彼女に届けなくては。こんなところで、へたばっている場合じゃない。

僕の耳の奥底で、まだ悲鳴が聞こえ続けている。誰か、と助けを呼ぶ悲痛な声だ。

『……を助けて、誰か ！』と。

「あの女は、川で兄を亡くしている。両親の注意も聞かずに一人川へと遊びに行き、ぬかるみに足をとられ流されかけたのを三歳年上だった兄が助けた。しかし妹を大きな石の上に押し上げた直後鉄砲雨で増水した川が背丈の小さな少年を幼かった妹の目の前で押し流した」

「突然、何の話を……しているんですか、諫早さん」

本当に、何の話をしているのだろう。雨だからって、川の近くだ

からってそんな。

「……兄の遺体は見つからないまま、小さな棺桶は少年を偲ばせるものだけが詰め込まれて出棺した。妹は、両親も少しづつ諦めていく中ずつと長いこと兄を探し続けた。しかしそれは幼かった妹にとつて重過ぎて、やがて彼女は少しづつ死を願うようになった。この辛い中から、逃げ出したいと。

妹は、幸せな一瞬をずっと無意識に待ち望んでいたんだ。自分が、悲しみや苦痛、罪の意識から逃れられたその一瞬に死にたいと」
もがいていた僕の足がようやく動くことに成功した。

「届けなきゃ」

僕の体がふわりと動き出す。きつとお腹を空かせているだろう。僕だつてお腹が空いている。ハゲ頭の焼いたお好み焼きがおいしいかが心配だけれど、優しいそうなおばあさんが焼いてくれた焼き鳥が冷めたら悲しい。つまんで食べた一本はとても美味しかったから、あの子にも食べさせてあげたいんだ。

彼女が　あの子が、一人で川原に座ったまま膝に顔を埋めていた。
名前だつて、ちゃんと思いつけた。

「……アキナ？」

あれ、どうしたんだろう。小さな肩が、身体が震えている。
雨に打たれて寒いのかな？　でも大丈夫、まだハゲお好み焼きも焼き鳥もあたたかいよ。雨に濡れても平気なように、ビニールでくるりと巻いたから中身は濡れていないはずだ。

「お、にい……ちゃん……」

携帯電話があの子の手の中から転がって、雨の中にコロンと落ち

た。誰かとまだ通話中だったのか、画面が明るく輝いている。

こんな激しい雨でも、少し遠くで催されているお囃子が止むことはなかった。いつそ勢いづいて花火が上がるその時を待ち侘びているようだ。雨なら花火は上がらないって昔誰かが言っていたけれど、今日は上がってもらわなきゃ困るんだ。川がキレイな場所なんだって、怖くないんだってあの子に教えてあげたい。

もう、辛い思い出なんかないんだよって。

「……明菜！」

と、僕とは別の男が後ろから大声であの子の名前を呼んだ。小さな肩がかわいそうなくらいにビクリと震えて、恐る恐るといったようにこちらを見上げてきた。

すっかりキレイになってたから気づかなかったよ。

僕の顔は鏡には映らないから、自分の顔がどうなったのかだって分からないんだもの。なのに、泣きながら僕を見上げてくる顔が、その表情が　あの時の君と重なる。

「明菜、お兄ちゃんの骨が見つかったんだ！　早く家に帰ってやるう、もう少して彰人がやつと……やつと家に、帰ってくるんだ！」
抱きしめたくて一歩踏み出した僕よりも早く、大人の手が明菜の腕を掴んだ。

「た、タニカワ君が……」

「タニカワ？　ああ、今日明菜と遊んでいた子か？　しかし、あっちから走ってきたが明菜と同じくらいの高校生なんて一人もいなかったぞ？　きつとその子も雷に驚いて避難しているんだ、大丈夫」

あれ、この人って……父さん？　こんなに白髪が生えたんだ。

でも、と明菜はイヤイヤをするように腕を取られたまま座り込んでいる。

いい加減にしなさいと言われても、それでも座り続けていた。

僕なら、ここに居るけれど。

良かったね、君にも見えなくなっただ。

「……チツ。どうやらお前が勝ったみたいだな」

派手な舌打ちを漏らした諫早さんも雨に濡れている。僕も、濡れている。ちゃんとここに在っても、僕たちはいない存在。

「あの女は夢のような一瞬をずっと狙い続けていたからなあ。現実を見せつけられたら却って死ねないんだろ。俺たちはしばらく死ぬ予定のない人間には基本的に見えやしない。しかも、あの女は俺の最後のチャンスから見事に逃げ切ったつーわけだ……全部お前に救われて、な。てめえーはとんだ疫病神だねえ」

「……あ、あの、約束」

疫病神だなんだと僕のことを言いながら、黒スーツの死神はやけに楽しそうだ。僕との賭けに負けて仕事にも失敗したくせに、何故楽しそうなのだろうなんて今は考えていられない。

雷鳴と共に、最初の花火が勢い良く上がり、空に大輪の花を咲かせる。火薬の残りかすが雨粒によって地面へと叩き落とされる。

「さあ、何を望む？」

死神が、晒った。

「岸野さあん！ だから言ったでしょ、あなたの車はもうないんですってば！」

一体この会話を朝から何度繰り返しただろう。少し視線を遠くに飛ばしながらネクタイを緩めて、僕は今日も照りつける陽射しを手

でつくった影の中から見上げた。

「いやいや、アキトくん、よく聞きたまえ。ワシの車はきつとあのヤクザが持つて行きおつたんじゃあ！」

ふがふがと岸野さんの入れ歯が抜け出そうになって僕はハラハラとする。

真面目に仕事をするのも結構疲れるものだ。あのヤクザ、というのは紛れもなく僕の雇用主のことだろう。こんな暑い日に涼しい顔して黒スーツなんて、あのひとはやっぱりおかしい。

……人、じゃないけどさ。

「祭りじゃ祭りじゃ！」

「そーですね……」

威勢よく通り過ぎていった神輿に、今まで真剣に己が数年前に売り払った車の行方を僕に詰問していた岸野さんは、今にも踊り出しそうな勢いで歩き出した。

今日は花火大会の日。

日中から立ち並んでいる屋台通りには、浴衣で決め込んだ女性やら子どもたちやらが楽しげな声を立てて歩いている。

岸野さん家の縁台あたりに吊るされた風鈴が暢気に風を受けて涼やかな音を立てた。ふらふらと歩いていく岸野さんを追いかけて、僕も人々の流れが溢れるところまで歩き進めたところだ。

「暑いね」

落ち着いた女性の声が後ろからかかった。

「本当だよ、暑くてたまんねえ」

それに返す低い声。

「明菜ノ家の灯籠は何だか小学生でも喜びそうなヤツだよな」

続いていく会話に耐え切れず、僕は後ろを振り返っていた。目の前には少し大人になったあの子が　明菜が知らない誰かと歩いている。短くなつてしまった黒い髪に浴衣をしゃんと着て、大事そうに両手で小さな灯籠を抱え持って。

「うん、お兄ちゃんがね、好きだったものをお父さんとお母さんと私とで描いてみたの。私、絵が下手だからみんなに笑われちゃったけど……」

苦笑した明菜が自分が描いたらしい絵を隣を歩く男へと指差すと、男も困ったように笑う。

「本当だな……兄ちゃん、それが何なのか見たってわかんねーかもよ」

「うう、それを言われると辛いけど……でも、大丈夫だよ。ちゃんと今年も家に帰ってこれますようにって、祈りを込めて流すから」
そっか、と男が優しい顔で微笑むと、明菜がえられるようにして微笑む。

やがて二人は僕の前を通り過ぎ、たまに笑い声を立てながら屋台が連なる通りへと向かつて行った。

「後悔しているか？　あの願いが叶ったことを」

「うへえあ!？」

ぼん、と肩を叩かれて僕は飛び上がった。だから、背後から気配を消して現れるのはやめて欲しいと僕は何度も何度も言っているのに。

現れた諫早さんはさっきの男じゃないが苦笑して、僕の隣へと立った。岸野さんはいえばのんびりと日光浴をしているカメ釣りのカメたちを仏顔で見守っている。

「なんだ、図体はでかくなっても相変わらず気の小さいヤツだな。そんなんで俺の手下が勤まるのか？　ああ？」

「そつ、そんなに凄んだつて僕の能力が上がるわけじゃないですよ、諫早さん！……それと、僕は後悔していませんよ。タニカワだった僕を妹が知っていたままだつたら、妹の頭の中にあるままだつたら明菜はあそこからも立ち上がれないような気がしたから。いや、そりゃ心配でしたけど。さつきね、妹の笑顔を見れたから。もう大丈夫だつて思えました」

そりゃ、タニカワだった僕がキレイさっぱりと彼女の中から消えてしまったのは寂しい。けれどあんなに綺麗な花火が上がる中で泣き続けていたあの子が、僕との約束のせいであそこに居続けていたら、彼女は死ぬことを止める代わりに立ち直ることも出来ないような気がしたのだ。

「……幸せに、ね」

最期に君の泣き顔を見た時からずっと想い続けていた。

もう、届かないと分かっている。

ずっと見送り続けていた彼女の背中が、ふと歩みを止めた。どうした、と気遣う隣の男にも応えず、ゆっくりと　あの子が、こちらへと振り返る。

やがて彼女はゴシゴシと目を擦り、再び気遣うような言葉をかけたらしい男に左右に首を振って見せると、二人は再び笑いあって賑やかな屋台通りへと吸い込まれていった。

「つたく、暑い日に熱いもん見せつけてんじゃねーよ、なあ！　お前、罰として今夜の花火、俺に付き合え」

「……でえ？！　なんで、どうしてそうなるんですか！　ああっ、岸野さん！　カメをつついてもどこにも行けませんから！！」

本当に暑い一日だ。

けれど。

さらさら流れる川の岸辺で、花火を楽しげに見上げる愛しい人たちを傍で見られるかもしれない……そんな、素敵な祭日。

4 (後書き)

ここまで読んでくださった方がいましたらありがとうございます！
少しでも季節が感じられれば良いのですが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5205m/>

さらさら、流れる

2010年10月10日12時21分発行